

The Record by an Old Guy in the world of Virtual Reality Massively Multiplayer Online

とあるおっさんの VRMMO活動記



椎名ほわほわ
Shiina Howahowa

25

はくう
白羽

戦いを求めてさすらう
謎の太刀使い。
一見人間の女性だが、
その正体は……



アース

本編の主人公。
マイペースなプレイぶり
で知人ぞ知る存在に。
リアルでは38歳独身の
会社員、田中大地。



龍神の欠片

「龍の国」の守護者である
龍神の分身。
通常、その行動には
制限が課されている。



パワードスーツ

数々の武装を使用可能な
トデモ兵器。
製作者の知識と意識が
移植されている。



うりゅう
雨龍

「龍の国」で崇められている
双龍が一人。
妖しいほどの美女にして
凄腕の武人。



さりゅう
砂龍

「龍の国」で崇められている
双龍が一人。
物静かな外見によらぬ
凄腕の武人。



【スキル一覧】

- 〈風迅狩弓〉 Lv 50 (The Limit) 〈碎蹴 (エルフ流・限定師範代候補)〉 Lv 46 〈精密な指〉 Lv 54
- 〈小盾〉 Lv 44 〈蛇剣武術身体能力強化〉 Lv 31 〈円花の真なる担い手〉 Lv 10
- 〈百里眼〉 Lv 44 〈隠蔽・改〉 Lv 7 〈義賊頭〉 Lv 87
- 〈妖精招来〉 Lv 22 (強制習得・昇格・控えスキルへの移動不可能)
- 追加能力スキル
- 〈黄龍変身・覚醒〉 Lv 15 (Changel) 〈偶像の魔王〉 Lv 7
- 控えスキル
- 〈木工の経験者〉 Lv 14 〈釣り〉 (LOST) 〈人魚泳法〉 Lv 10
- 〈ドワーフ流鍛冶屋・史伝〉 Lv 99 (The Limit) 〈薬劑の経験者〉 Lv 43 〈医食同源料理人〉 Lv 25
- EXP 53
- 称号：妖精女王の意見者 一人で強者を討伐した者 ドラゴンと龍に関わった者
- 妖精に祝福を受けた者 ドラゴンを調理した者 雲獣セラピスト 災いを碎きに行く者
- 託された者 龍の盟友 ドラゴンスレイヤー (胃袋限定) 義賊 人魚を釣った人
- 妖精国の隠れアイドル 悲しみの激情を知る者 メイドのご主人様 (仮) 呪具の恋人
- 魔王の代理人 人族半分辞めました 闇の盟友 魔王領の知られざる救世主 無謀者
- 魔王の真実を知る魔王外存在 天を穿つ者 魔王領名誉貴族
- プレイヤーからの二つ名：妖精王候補 (妬) 戦場の料理人
- 強化を行ったアーツ：《ソニックハウンドアロー Lv 5》

1

ついに開放された空の世界。雨龍さん・砂龍さんの二人（二龍と言うべきか？）と共にそこへ乗り込んだアースこと自分は、来るべき有翼人との決戦に備える作戦に参加し、仕掛けられた洗脳装置を捜し出すべく秘かに活動していた。これまでずっと一緒だった妖精アクアは、見る人が見れば非常に目立つ存在なので、いったん地上で留守番だ。

そして北の浮遊島にある闘技場で、有翼人の過去の歴史を幻視した翌日。「ワンモア・フリーライフ・オンライン」の世界にログインすると、こちらはお昼の時間だった。

「あの後、魔王殿への報告はこちらで済ませておいた。お前が心配することは何もない」

との砂龍さんの言葉に、自分はほっと一安心。もう寝ないといけない時間が迫ってきていたことばかり気を取られて、この作戦の参加者による報告会をついとうっかり忘れてしまったんだよな。

「ありがとうございます、助かりました」

自分のお礼に、砂龍さんは短く「うむ」と頷いた。

そして運ばれてくる食事。今日は雨龍さんが作ったようだ。ゆつくりと堪能し、腹が満たされたところで宿を出る。

「今日からは北東の島じゃな。ここは大きな森となっておつて、エルフ達が住まう場所に似ているそうじゃぞ」

ふむ、今度は森か……モンスターはいないからあまり気を張る必要がないのは良いことだが……どこかに隠れているであろう洗脳装置を探すには、ちよつと手がかかりそうな地形だな。

「とにかく、行ってみなければ分からぬ。早々に向かうとしよう」

砂龍さんの言う通り、行ってみなければ始まらない。

北の島から中央の島に戻り、そこから北東の島へと移動。そこで目にしたものは、確かに森だった。整った道が数本あり、一定の整備はされているようだ。

『道があるつてのがちよつと厄介ですね。森の奥に進まないといけないときに目立ってしまいそうです』

二人にそんな念話を飛ばす。他の人達も道に沿って歩いており、そこから外れる人はいそうになる。そしてそんな道の近くに、洗脳装置を置いておくとは思えんのだよなあ。もしあったとしても子機止まりで、本命の親機は奥に隠すだろう。裏をかいてくる可能性もないとは言えないが。

『確かにのう、しかも人が多いから誤魔化すのも少し骨じゃの』

雨龍さんも同意見。自分が持っているスキル〈隠蔽・改〉は、人の視線があるところで簡単に気配を消せるレベルではないから、何らかの手段を用意しないと。

『ひとまず宿を探すぞ。その後、ひと通り森の中の道を回って地形を理解して、作戦を立てる。魔王殿からは、こちらの仕事は想定していた以上に速く進んでいるから、慌てなくてよいと言われている』

砂龍さんから念話の返事。ふむ、それならいいか。あまりにもたまたまするのは論外だが、急いで仕事を仕損じるとも言う。焦って相手の警戒心を高めるようなことがあってはならない。向こうもバカじゃないだろうからいざればバレルだろうが、そうなつていいのは全ての島にある洗脳装置の場所を探り当てた後だ。

そして集中的に自分に攻撃を仕掛けてくるようになれば、別動隊が動きやすくなる……バレルにしても、そういう風には持っていきたい。

『了解です、この宿は森の中にあるようですから、道に沿って進めばいずれ見つかるとは思いますが……森の前にはいくつかの案内板が設置されており、そこに森の中にある宿のグレードも記載されている。それを参考に進む道を決めている人も多いようだ。そして自分達は中ぐらいのグレードを選ぼうとしたんだが……その道が一番人が多い。この様子では、満室で宿泊を断られる可能性が高い。低い階級の宿は嫌じゃぞ。汚いのが嫌とかではなく、防犯的に穴だらけという可能性もあるから』

の。まして、わらわ達が身に着けている物の中には、見られたくない物がいくつもあるのじゃぞ？
金銭をケチって大事を引き起こしたくはない』

あー、そういう心配もあるか。手癖の悪い連中がいなくても限らないし、万が一そんな連中に洗脳対策のアンクレットをいじくられたら一大事になる。自分達がそうそう簡単に重要な装備を失うようなミスをするはずがないと思いたいが、そうなる可能性が高まる行動を避けておくほうがいいに決まっている。

『うむ、面倒な連中に絡まれては面倒だからな。先の闘技場では殴り倒すことも可能ではあったが、この島ではそうもいくまい。ここはこの道を行くべきだろう』

砂龍さんはそう言って、グレードの高い宿がある道を選ぶ。特に反論する理由はないな。

『ではそうしましょうか。この道はあまり人がいませんから、満室で泊まれないということもないでしょう』

そうして歩き始めたのだが……しばらく歩いているうちに《危険察知》先生が敵性存在の反応を捉えた。

「雨龍さん、砂龍さん」

「うむ」

「分かっている」

モンスターではない。この反応は「ワンモア」世界の人族だ。この近くには、自分達三人に加え、見るからに高級な服を身に纏っている人族男女と子供二人の親子四人、毛が真っ白の老狼獣人が一人、ダークエルフの女性が二人いる。この合計一〇人を取り囲むようにしながら、敵は徐々に距離を詰めてきている。

面倒だ、こんな場所で盗賊に出会うなんてな（こんな動きは盗賊しかしないだろう）。数は三〇人ちよいだ。

「——む」

「姉さん」

「ええ」

やがて老狼獣人とダークエルフの二人も、盗賊の存在に気が付いたようだ。老狼獣人はナツクルを手にはめ、ダークエルフの姉妹は弓を手に取った。自分もこのタイミングで弓を手に取る。

と、ここでお互いの視線がぶつかり、皆で頷き合う。人族の親子だけはまだ状況を理解できていないようで、訝しげな目をこちらに向けている。まあ、もうちょっとで分かるよ。向こうは包囲をほぼ完成させているからな、そろそろ仕掛けてくる。

そうして森の中からがさりと音を立てながら姿を現したのは……ギリースーツと言うんだったかな？ 葉っぱなどで体を包み、ぱっと見ではそこに人がいるなんて分からないようにしている人族

だった。目の前に出てきたのは六人で、短刀やロングソード、クロスボウを持っている。

「お前ら、有り金を全て置いていけ。時間は与えん、有翼人どもが巡回しているからな……逆らうそぶりを見せたら即座に殺す。賢明な判断を期待する」

要求がドストレートですな。クロスボウがこちらに狙いを定めている。

さて、もちろんそんな『相手にとつて都合のいい』賢明な判断なんぞをするつもりはないので、攻めに転じるタイミングを計りたいが……人族の親子が倒れ込んでしまった。無理もないな……自分だって現実世界で突然剣やクロスボウを向けられたら怖いよ。

「ふん、何も言わんか。ならお前達の死体から金目の物を頂いていくとしよう」

こつちが誰一人答えなかったので、向こうは早々に攻撃することを決めたようだ。目の前の連中だけでなく、周囲の森に紛れている奴らからの殺気も高まり——そして放たれる矢。

だが、この攻撃で死者が出ることはなかった。

自分はさつき手に取った【八岐の月】を振り回してその矢を弾いた。老狼獣人は必要最少限の矢のみナツクルで弾き飛ばし、残りは回避した。ダークエルフの姉妹は高く跳躍することで回避。そして人族の親子四人は——

「貴様らのような外道に、この者達の命を奪わせるわけにはいかぬ」

「下種が。覚悟するがよいわ」

素早く飛び出した雨龍さんと砂龍さんが、飛んできた矢を全て掴み取って守っていた。そんな二人の姿を見て、盗賊側は呆気に取られている……好機ッ！

自分と老狼獣人とダークエルフの姉妹は、一瞬だけ視線を合わせると同時に頷き、各自行動を開始。老狼獣人が姿を見せている盗賊達に突撃し、自分とダークエルフの姉妹は周囲に隠れている盗賊連中に対して矢を射る。

自分は《危険察知》で相手の位置が丸見え状態で、ダークエルフの姉妹はその目の良さでギリースーツの隠蔽性を破っているようだ。

「ぎゃああー！」

「あがぁ!？」

「ぐひっ!？」

「げっ……がぁぁ……」

無駄撃ちをしないように気を付けながら、盗賊達の命を射抜いて消していく。

時間にして三分前後だろうか？

「終わったか」

「ええ、周囲にいた連中は全滅。残りはこの六人だけですわ」

人族の親子を護っていた砂龍さんの言葉に、自分が返答。



隠れていた盗賊は皆三途みずの川かわを仲良く渡り、最初に目の前に出てきた六人は地に伏している……
ダークエルフ姉妹の弓の腕も素晴らしかったので、楽な戦いだった。

さりげなく雨籠さんが人族の家族四人を立たせ、この場から遠ざけた。ありがたい、これで心置きなく最後の始末が付けられる。

「幼子の目があるのではな、今はこの程度に抑えてある」

老狼獣人が小さな声でそう告げてきた。やっぱりそうか、凄惨せきさんな光景を見せないための気配りをしたんだな。地に伏した六名は「痛い」だの「苦しい」だの呻うないているが、情けをかけるつもりはない。

「く、クソ……俺達をどうするつもりだ」

盗賊のリーダー格の男が上体を起こし、こちらを睨にらみながらそんなことを問いかけてくるが……

「殺しを仕掛けてきたならば、返り討ちにあつた後の結末など容易たやすく分かるだろうが」

「まったくだわ、終わり方は決まってるわよね」

「ましてや不意打ちで射かけたのでもない」

老狼獣人さん、ダークエルフの姉妹の言う通りだ。それに、自分としてはこいつらを生かして有翼人達に渡したくない——こいつらをモルモットにして、連中の洗脳をはじめとする様々な研究が更に進んでしまうという事態を避けたいのだ。そういう展開が『ない』とは言い切れない以上、可

能性は確実に潰す。

自分に向けてどこか縋るような目を向けてくる盗賊リーダーに、自分はこう言い放った。

「有り金を全て置いていけと脅し、続けて死体にして奪うと宣言。そしてその言葉を実現すべく戦闘行為を仕掛けた……そこまでやっておいて、返り討ちにあっても許してもらえないなんて、そんな甘い話があると思うか？」

自分の言葉を聞いた直後、盗賊リーダーは左手で何かを持って自分に投げつけようとした。だが、それよりも早く老狼獣人の拳が盗賊リーダーの腕を吹き飛ばした。文字通り、盗賊リーダーの肘から先が吹き飛んだのだ。

速いな。今のは自分でも十分対処できたが、この老狼獣人の拳に対処することは難しいだろう。

盗賊リーダーはその痛みに悲鳴を上げようとした……が、その前にダークエルフ姉妹の一人が盗賊リーダーの顎を蹴り上げて破壊する。おっと、容赦ないけど良い蹴りだ。

「幼い子供に、貴方のような下種の悲鳴なんて耳に入れてほしくないの。分かる？」

あ、そこは同意だわ。こんな連中の醜い声など聞かせたくないよ。ましてや殺されかかった状況でかなりの精神的な疲労が溜まったところに変な声でも聞いたら、トラウマになりかねない。

「通りがかった者に変な誤解を招くのは避けたい。さっさとケリをつけてしまおう」

老狼獣人の言葉に皆が頷き、六人の盗賊にとどめを入れる。連中の死体はしばらくして塵となり、

消えていった。

「まったくつまらぬ真似をしてくれる」

老狼獣人が首を振る。その表情は呆れ一色だ。

「まあ、ここで排除できてよかったと考えましょ。この先あいつらの被害者は出ないのだから」

「こんな奴らが活動しているという話は聞いたことがないわね。もしかすると、彼らの初仕事の相手が私達だったのかもしれないわよ？ ええ、そうだったと考えましょ、あの下種の手にかかった者はいなかったのだと」

ダークエルフの姉妹の言う通り、これ以上の被害はもう出ない、それで良かったのだとするほかないな。流石に見ていないところで起きてる問題なんか解決できるわけがない。

「こいつらにこれ以上の仲間がいらないことを願うばかりだ。観光に来る人も多い場所でこんなことを……いや、逆なのか。人が多いからこそこういう手合いが動くのか」

金の匂い、つてやつだな。

ただ、気になるな……こんな手合いがいることを、有翼人達が全く知らないとは思えない。意図的に泳がせている可能性が浮上してくるぞ……どういう考えがあるにせよ、碌なものじゃないだろうけど。知りたいとも思わない、と普段なら言うところだが、今は知りたい。しかし、その方法が思いつかない。

「あ、ありがとうございます。皆様方がいなければ、私達は今頃物言わぬ骸むくろとなって奴らに全てを奪われていたことは間違いありません。皆様方は命の恩人でございます」

と、そこに人族の家族の父親がやってきて頭を下げ、自分達に礼を述べた。

「構わぬ、あの手の愚おろか者によって殺されてよい命ではないと思っただから救ったまでよ」

これは老狼獣人の言葉。

「子供を怖がらせる悪党は嫌いな」

「あんなクズに子供が傷つけられるなんて許せないものね。そんな勝手な理由だから気にしなくていいわよ、おじ様」

とダークエルフの姉妹。

「ま、自分も似た理由です。そしてこうしてお礼の言葉も頂きました。これ以上の何かは望みませんので」

最後に自分。格好はつけたが、本心でもある。こんなときのお礼なんて言葉で十分。むしろここで恩にさせて金やら物やらを要求したら、下種になり下がるといものではないだろうか。

「皆様、本当にありがとうございます。皆様のような方々がいてくださって本当に助かりました」

もう一度こちらに向けて大きく頭を下げると、家族のもとに戻っていく父親。母親や子供達もこ

ちらと砂龍さんと雨龍さんにも頭を下げた後、四人は再び道を歩き出した。老狼獣人とダークエルフの姉妹も先に行き、そして待っていた自分に合流する雨龍さんと砂龍さん。

「あのような愚か者がこのような場所にもいるとはな」

顎を撫なでながら、渋い顔をしている砂龍さん。

「あの手のバカはいつの時代にもいるのう……まったく、悪党の最後など碌なものではないと知っておるうに。それとも、自分だけは最後まで捕まらずにやり通せるとでも思い上がるんじやろうかの。そこも含めて実に愚かじゃ」

雨龍さんの言葉ももつともだ。自分は大丈夫だなどと、大した理由もなく思い込んだやうだな。でもいつかはさっきのように捕まって、その屍しかばねを野のに晒さらすか、相応の場所に引つ張られていて首を刎はねられるか、そういう運命だ。

「まあ、とにかく悪事は食い止めました。今は先に進みましょう」

自分の言葉に、雨龍さんと砂龍さんは頷く。さて、あと少し歩けば宿があるはずだ。どんな宿が立っているのかな？

宿屋は木材で出来ている建物だった。サイズがデカく、一種の城のようだ。ただし日本風ではなく西洋風なので、自分にはどうもしっくりこなかったが。内装は華美ではないが趣があり、高級感を出していた。

無事に部屋を確保したところで、まずはひと息……と行きたかったのだが、砂龍さんから念話が入る。

『さて、アースよ。先程の襲撃、お前はどう見た？』

——さっきの盗賊か。あの手の連中がいること自体はおかしくはないんだが……とりあえず思ったことを挙げてみよう。

『まず考えられるのは、単純にこの空の世界の観光に来た者達からなら容易く財貨を奪えそうだと考えた奴らであつた可能性。この場合は有翼人側の監視の目をかいくぐっている形ですね。それから二つ目として、何らかの理由で有翼人側がわざと泳がせていた可能性もありますね』

自分の予想に、砂龍さんは首を横に振った。ふむ、すぐさま否定できるだけの根拠が砂龍さんに

はあるのか。なら、ここはいったん話を聞いておこう。

『あの人族の親子を護りながら、襲ってきた賊どもを観察した。そしてあやつらは十中八九、有翼人の洗脳の影響を受けた状態にあつたと見ておる。その理由は、奴らの頭部から、我らが捜している例の洗脳の魔道具と同じ波長を感じ取れたからだ。それも一人二人ではなく全員の頭から、な』
有翼人の洗脳による影響は、もうそんな段階に移行していたのか？ だとすると、自分達は何の罪もない人を殺したことになるのだろうか？ ……いや、攻撃されたからには戦わねばならなかったし、悲劇が生まれる前に止められたこと自体は間違いではないと思っっているが。

『——言っておくが、あやつらはおそらく洗脳を受ける前から賊であつたろう。襲い方、戦い方共に手慣れていたからな。いくら洗脳したとしても、知らぬ動きを無理やりやらされたならば、ぎこちなさが出るだろう。しかし、あの連中にそのような不自然さはなかった。だから、罪なき者を斬つたなどと考えなくてもよい』

なるほど、砂龍さんの見立てではそういう感じか。確かに自分から見ても、あの襲ってきた連中にそういった不自然さは感じなかったな。

『想像するに、あやつらはかなり前から有翼人どもに攫われていたのかもしれない。効率の良い洗脳の仕組みを作るための実験動物としてな。悪党ならば、長く姿が見えなくとも、どこかで振り返りにあつて野垂れ死にしたのだということに済まされるであろうから』

うーむ、有翼人はそんなことも笑ってやりそうなイメージだから、的外れだとは思えない。仕込みに時間をかけて、洗脳がバツチリ済んでいる…そんな連中が襲ってきた理由って、まさか。

『狙いは自分に雨龍さんと砂龍さん、だったのか？ 他の人達は近くにいたから巻き添えを食っただけ？』

自分の念話に、砂龍さんは頷く。

『私もそう考えている。つまり、こちらが邪魔になるから消したいと思う存在が出てきたのだろう。これは今夜の報告会で言っておかねばならんことだ。そしてそういった状況となると、洗脳装置捜しは困難になった。しかし…まだ潜伏しておらねばならぬ時である故に、力押し of 戦法を仕掛けて大きな騒ぎを起こしたくない』

そのとき、雨龍さんが口到人差し指を当てて、ドアの向こうを指さした。

——なるほど、人が集まっている。数は六、か。全員が有翼人だ。

『殺気や戦意は感じられぬから、踏み込んで来ぬだろう。しかし、目を付けられたのはやはり確かじゃな。今夜の報告会で、我々はいったん地上に帰ると伝えたほうがよさそうじゃ。その後、我ら龍の力を使って再び空に上り、例のおかしな地点を探索する方向に切り替えるでしょう』

ここまで疑われた以上、これ以上探索を続けるのは危険だからな。地上に降りるしかないという点も同意できる。しかし。

『一つ質問が。龍の力で再び空に上がるとの話ですが、自分達が空に浮いていたら、いやでも目立つと思うんですよ。それにそんな姿を見られたら、有翼人から完全に敵だと認識されて、余計厄介なことになりませんか？』

また空に上がれるということ自体に疑いは持っていない。このお二方の正体は龍だからね…ただ問題は、空を飛んだりすればどうしても目立つってことなんだよ。この空の世界では、有翼人が提供している小型戦闘機もどきで誰もが普通に空を飛び回れるわけだし。

『その点だが、一度龍の国に戻り、龍神殿と相談してみようと考えている。もしかすると、何かしらの解決手段があるかも知れぬからな』

今回は、地上全体が侵略を受ける危機。だから龍神様が何かしらの非常手段を使うことを許可する可能性はある。

『分かりました、一度地上に降りて新しい手段を考えることにしましょうか。このままここにも詰まってしまう未来しか見えません』

魔王様達も、状況を伝えれば反対することはなさそうだ。いったん引いておくのもまた戦法のはず。

『ついでに、闘技場のチップで手に入る物を持ち帰っておこうかの。魔王殿のもとに持っていけば、新たな対抗策や魔道具が生まれるきっかけになるかも知れぬ』

そういやこの前の闘技場で、雨龍さんは自分の勝ちに賭けてたよな。あそこの景品には使うと洗脳を受けてしまうカラクリがあるから、それを持ち帰って研究することで新たな対抗策の可能性を生み出せたら大きい。

『うむ、ではその方向で報告を行うか。我らを責める者も多少いるやもしれぬが、予定が狂う以上そこは受け止めるほかあるまい』

本来の予定では、洗脳装置を全て自分達が見つけ出すことになっていたからな。

『傷口を広げるよりはましだと同意してくれる人もいるはずです。誰か一人でも捕縛されて洗脳対策のアンクレットの存在が翼人側に知れたら、それこそ取り返しがつきません』

自分の意見に、雨龍さんと砂龍さんも同意する。

本音を言うなら一刻も早く地上に降りたいが、慌てた結果、碌なことにならないパターンは何度も見てきた。自分がそのパターンにはまる行動は慎重も。今はまだ何食わぬ顔でゆっくりと行動するべきだ。

『なにせよ、今はここで休息だ。連中もまだ確信までは至っていないのだろう、すぐに踏み込んでくる気配はない。だからこちらもこの状態を維持する。それでよいな？ むろん、いつ流れが変わるかは分からない。油断はするな』

自分と雨龍さんは砂龍さんの念話に頷く。

さて、そろそろ報告会の時間だ。やや気が重いが、事実を報告しなければもつとひどいことになる。包み隠さずに報告しないとね。

やがて完全に日が落ち、報告会の時間になった。

「なるほど、そちらの状況は分かった」

自分達の順番が来て、今置かれている状況を全て何一つ隠さず報告し終える。そうして返ってきた第一声が、魔王様のこの言葉だった。

「報告通り、ここは地上に帰還してもらったほうがよいかと。三人は十分な仕事をしましたし、有翼人が配っている品を持ち帰ってもらえば、洗脳に対抗する研究が進みます」

そしてその後も、擁護や同意する意見が中心になり、いったん引くのは適切な判断だろうという意見で一致した。また、

「別の者から貰っている情報で、お前達が目を付けられているつてのは俺達も分かっていた。お前らが言わないのなら、俺から提案しようと思っていたぞ。それに、お前達が目を付けられていたおかげで、こっちは色々やり易かった。だからいったん引いてろ、時を見てまたこっちに戻って動けばいいだろうが」

と、こういう場だからか、いつもより荒さを抑えた口調でグラッドが同意してきたのには、

ちよっと驚いた。ちなみに、そのグラッド達は各島を精力的に探索し、色々な発見を持ち帰ることで有翼人達からの信頼を得るように動いている。

ともあれ、自分達は次にログインしたタイミングでいったん地上に戻ることに認められた。「研究材料にしやすい物を選んで持ち帰るつもりじゃ。即座に調べられる準備を整えておいてほしいところじゃな」

と雨龍さん。それらの品物を揃えるのは、自分がログアウトしている間にやっておいてもらえるそう。

「うむ、期待している。時が惜しいのは事実だが、急いで優秀な人材を失うという愚かな真似をするようでは、勝てる戦いも勝てぬ。再び時を得るまで、地上で活動してほしい」

この魔王様の言葉で、自分達に関する話は終わった。

その後も報告がぼつぼつ上がるが、有翼人達がぐさま地上に進攻しようとしているという気配は今のところ感じ取れない、という結論に達した。といっても、状況はいつ何時変わるか分からないので、監視は当然継続される。

「皆の働きに感謝している。まだまだ辛い時期が続くが、今は耐え忍ぶ時だ。必ず奴らの首に刃を叩き込む機会はある！」

[[[[[はっ！！！！]]]]

魔王様の言葉と、それに応える皆の声で、この日の報告会は終了。通信を終える。

『すんなり許可が出て助かりましたね』

雨龍さんと砂龍さんに、そう念話で話しかける。

『魔王殿は愚物ではない。きちんと状況を伝えて理を説けば問題ないと確信していたぞ』

これは砂龍さん。

『そうとも。きちんと筋が通る話をすれば、柔軟に対応する方じゃ。わらわもそこには何も不安などなかったぞ。周囲の反応は読めなかったが、こちらの状況を理解できる者ばかりで助かったのう』

と、雨龍さん。他の作戦参加者から批判が出る可能性は考えていたが、蓋を開ければいったん引いて建て直せという意見ばかりで、いい意味で拍子抜けした。

その判断が間違いはなかったということ、いづれ何らかの形で証明する必要があるな。

『急くな。気持ちは分からぬでもないが、成果を出そうと急ぐことは失敗に繋がるぞ。今できることをすればいい。そして我らがすべきことは、有翼人の品を手に入れて魔王城に戻ることだ』

つとと、そんな念話が砂龍さんから届く。どうやらこちらの心情を察したらしいが、釘の刺し方が上手い。ああ、確かに自分は成果を出したいと考えた……その考えこそが焦りなのだ。

『目標を立てることは重要じゃがな、先ばかり見ているは、足元の石に躓き、大怪我を負うことも

ある。お前はそのことを分かっているはずじゃ。魔王殿の言っていた通り、必ず時というのとは来るものよ。いざ出陣となったときに適切な動きができぬようでは、悔やんでも悔やみきれんぞ？ それに、一歩引いて周囲を見れば、意外な所から機会を得ることもある。じゃから、時には引くことも重要なのじゃ』

む、そうかも。今の雨龍さんの言葉にも納得できる点が多いな。

時間もチャンスも、人を待つてはくれない。人が、その時間やチャンスに合わせなきゃいけないんだ。

『仰る通り、無意識のうちに焦ってしまっていました。少し、頭を冷やしたほうがいいですね……そういう点でも、一度地上に戻るのはいいい機会だったと考えます』

このお二方がいてくれてよかった。もしここで自分一人だったら、焦りからがむしゃらに突っ走って、その結果取り返しのつかないミスをやらかしていた可能性がかなり高かっただろうな。

そうになったらその後は……うわ、考えたくない結末を迎えているところが簡単に想像できてしまった。

『そろそろ寝ておけ。休息のとれておらん頭で考えることなど、碌なものではない。ゆっくりと休息をとって、また頑張ればいだけだ。そうだろう？』

と、砂龍さんが休むことを進めてくる。今日はそうしておこうか、報告も終わらせたし、ログア

ウトしても何の問題もない。

『うむ、休むときには休む。とても大切なことじゃ……なに、休んでいる間に何かあったとしても、わらわ達二人でどうとでもしておく。安心するがいい』

雨龍さんもそう言ってくれるし、ログアウトするか……時間的にもそろそろなタイミングだ。

「眠くなってきたんで、そろそろ寝ます……お先にお休みなさい」

「うむ、ゆっくりと休め」

盗聴されていることを見越して、あえて声を出してからベッドの中に潜り込む。無言が続けば、怪しまれてしまうだろうから。

さて、有翼人達はどう出るか。次にログインしたとき、ここが消えてなくなるとかそういうことになってないといいなあ。

754：名無しの冒険者 ID：HRhra6wdr

とにかく首への被弾だけは何としても防がないとダメ
あいつらの刃が首に当たったら九割首が飛ぶと置いていい……

755：名無しの冒険者 ID：HRg5wefhg

更に三体以上来たらもう絶望しかねえ
あいつら、こっちよりも洗練された連携攻撃までやってきやがる

756：名無しの冒険者 ID：RUrat5wdg

二体でもやってくるけどね
左右から同時に切り込んでくるとか、
前進してくる奴の後ろにいた奴が飛び掛かってくるとか
……で、首がまた飛ぶ

757：名無しの冒険者 ID：k32f5fRgw

マジで今までのモンスターとは格が違うわ
モンスター相手じゃなくてガチの対人戦だって考えないと戦いになんない
一瞬の油断で誰かが死ぬ

758：名無しの冒険者 ID：AEdefd5gW

運営の本気ってことか？
でもさ、他にもモンスターはいるんだよね……
紫電を発する空飛ぶ球体
あいつも色々厳しい

759：名無しの冒険者 ID：Olstdy12

正式名称知らんけど、通称『魔法殺し』
魔法がほとんど無効化されちゃう……
無効化されなきゃダメージ通るみたいだけど、
体感で七割ぐらい無効化されるからなー

空の世界) 雑談掲示板 No.6877 (ダンジョン怖い

748：名無しの冒険者 ID：5efa3wEwd

乗り物で行くことができる島の中にダンジョンがいくつか発見されたが、
進行状況的に見ると進みが遅いよね？
まあ仕方ないんだけど……難易度めっちゃ高すぎ

749：名無しの冒険者 ID：EFw52EF2g

運営……なんでここに来て、ファンタジーの皮を被ったSF突っ込んだし

750：名無しの冒険者 ID：JUhr21reF

罾もレーザーフェンスとかになってるもんな
周囲が岩壁だから、ぱっと見は今までと変わらないんだけど……

751：名無しの冒険者 ID：3rgsWed52

出てくるモンスターも、オートマターって言うんだっけ？
とにかくそういうやつだからな……
しかも怖いところは、こちらの首をポンポン刈っていくこと
俺達の首は作物じゃねーっつうの

752：名無しの冒険者 ID：AEWFFbv3X

女性的なフォルムで……何て言えばいいの？
表現が難しいんだが、クネクネツとした動きでいつの間にか近づいてきて、
手の甲や足の脛辺りについてる異様な切れ味を誇る刃を振りかざしてくる
もうあいつら相手にタンクやりたくないんですが

753：名無しの冒険者 ID：JTDS2db7e

初めて戦った時は唖然としたよ
スルスルッと近寄られたかと思うと一瞬でタンクの首が飛んでたんだから
で、その後に自分の首が飛んだというね……

765：名無しの冒険者 ID：Js2erf45e

ギルメンが言ってたよ
今まで〈光魔法〉を攻撃特化に伸ばしてるって言うと、
野良パーティへの参加をすぐ断ってきた連中が、
今じゃ手のひらを返すどころかドリルのように高速回転して
すり寄ってくるのがめっちゃ気に食わねえって
まあ気持ちは分かる

766：名無しの冒険者 ID：RGGs45eRd

しかし、悲しいかな……効果が絶大すぎるんだよ
ああいう謎な存在に対しての《アッシュ・シャイン》の攻撃能力
たいてい一発で灰にして消し去ってくれるから、
使える奴が一人いるといたないとでは生存率の差が段違い過ぎてもうね……
募集がかかるの無理もない

767：名無しの冒険者 ID：Jtsr4wdFe

現実はこのもんだよな……
今までは要らないとか言ってたくせに、
有用性が認められた途端に揃いも揃って手のひら返す
これ「ワンモア」に限った話じゃない、どこでもそうよ

768：名無しの冒険者 ID：Klerst1gu

でも今まで要らない子扱いされたプレイヤーからすれば、
報われたって感情より、
お前ら昨日まで言ってたことを思い出してみろって
言いたくなるのも事実だわ

769：名無しの冒険者 ID：WRHhar5gB

弓や盗賊のときもあったそういう流れって、
いつになっても変わらんよなー

760：名無しの冒険者 ID：REHTerg1w

攻撃方法は単純な体当たりだけだか、周囲に紫電を纏ってるせいなのか、
攻撃をまともに受けると [スタン] の状態異常を食らうことがある
特に金属系防具多めのタンクがやばい
対策仕込んでないとガンガン [スタン] 食らう

761：名無しの冒険者 ID：EFDEf54wB

対策してるタンクもそれなりにいるけど、
スタン抵抗防具って未だにややお高めなお値段だからなー
……対策してても甘いとかいつに [スタン] させられる

762：名無しの冒険者 ID：EGFegw14w

そしてその両者がパーティ組んでると、もう絶望しかない
オートマターに魔法放つと魔法殺しがカバーしに来るし、
範囲魔法で一気に焼こうとしても、かなり威力が減衰してるっぽいから、
効かなくなっちゃう

763：名無しの冒険者 ID：Baf1wdHwe

そんな厄介極まりない魔法殺しに唯一効く特攻とも言えるのが、
〈光魔法〉の発展先にある《アッシュ・シャイン》……
あれ、〈光魔法〉を補助じゃなく攻撃に用いるタイプに進ませないと、
手に入れられないらしいね。自分は支援方向に進ませてたから使えない

764：名無しの冒険者 ID：EGew5dgEg

あー、あれか
今、魔法使いは《アッシュ・シャイン》の有無で、
野良パーティでの拾われ率が露骨に違うからなー
もともと〈光魔法〉は補助が得意だったから、
攻撃メインに用いてた人はそう多くなかったんだよな
それがここに来て攻撃運用を求められるってのが……

775：名無しの冒険者 ID：EGgr1weer

刃は鍛冶屋が新しい剣なんかを作る素材になるぞ
もっとも、めちゃくちゃ鍛えた人じゃないと加工できないけど

776：名無しの冒険者 ID：SDTRUrgs5

変わり種で、その刃をできるだけ生かしたスネークソードを作る職人がいた
見た目は刀身が広いブロードソードみたいな感じなんだけど、
展開するとちゃんとスネークモードになる
あの異常な切れ味の特性を殺さずにいるから、すげえ切れる
オートマターの首を今度はこっちが落とすことも可能になった

777：名無しの冒険者 ID：Kras4gWE8

あー、良いなそれ
必要な刃の数は多いんだろうけど、スネークソードのスキル持ちなら、
作る価値ありだな
遠距離から敵の首を飛ばせるってのは強いぞ

778：名無しの冒険者 ID：TYFJtesh2

パーツのほうは、有翼人に売りつけるといい値段で買い取ってくれるね
パーツを解析しようとしてる職人もいるけど、
そっちのほうはあまり進んでないって話だが

779：名無しの冒険者 ID：RHDferw5S

狩れば良い稼ぎになるし、すごい武器が作れるんだよね
狩れば、だけどさ

780：名無しの冒険者 ID：aewCs5eBg

大半の人は首を刎ねられて終わり、って感じだな
もちろん今のところは、だけど
慣れてくればもっと倒せるようになってくるだろう

770：名無しの冒険者 ID：Oodtsy1rsf

あの、皆さま
自分はそのオートマター以前に、メカ犬に勝てないんですが……
どうしたらいいでしょうか？

771：名無しの冒険者 ID：OFG5sefaW

メカ犬って、ダンジョンの浅い所にいる番犬みたいなあれか
どうしたらいいか……
勝てるようになるまで戦うしかないな
オートマターが気になるのかもしれないが、
あの犬に勝てないなら奥に来るのは無謀としか言えない
あれに余裕を持って勝てる連中が、
オートマター相手には一瞬で首を落とされてるんだからな？

772：名無しの冒険者 ID：KYGTSfd4w

うむ
あの犬を模したメカは確かに強いけど、奥はマジで狂ってるから
あの犬相手に勝てないまま来たら、
気が付かないうちにパーティ全員の首が無くなって可能性があるぞ

773：名無しの冒険者 ID：RTUtysd2F

上の二人の言う通りだね
ダンジョンは逃げないんだから、
スキルLvを上げるなり装備を更新するなり、
もっと腕を磨いてからチャレンジしたほうがいい
マジでこういうアドバイスしかできない

774：名無しの冒険者 ID：OUyr2tQd7

ちなみにドロップ品はどうよ？
なんかのパーツとか、オートマターが体に着けてた刃とかが落ちるけど

786：名無しの冒険者 ID：WAEFfew85

ただ、オートマター達の連携攻撃だけはマジで注意
機械だからなのか、すげえ正確に攻撃を決めてくる
タンクの負担を減らすために、特に弓使いやスネークソード持ちは、
少しでもオートマターに攻撃を入れて、動きを妨害してあげよう

787：名無しの冒険者 ID：ESAGfe2dW

タンクが落ちたら、その後は自分達だからな……
とにかく少しでも妨害を入れてタンクを護らんと

788：名無しの冒険者 ID：f6gf8Ue5f

でもそれを咄嗟にできるようになるまで、もうちょっとかかりそう
今までの経験が問われるダンジョンだわ

781：名無しの冒険者 ID：EGeg5fB6E

しかし現時点で、そんなオートマター達をガシガシ狩る連中が
存在しているという事実……お約束通り、グラッド達なんだけどよ
あいつらおかしいわ

782：名無しの冒険者 ID：WDge6gefW

そうそう、「最強を目指す」だとか、最初は何言ってんだと笑ってたけど、
今となってはその頃の自分を殴りたいわ
あいつら本当に強すぎる
あのオートマター達を次々と撃破していくんだもんな……

783：名無しの冒険者 ID：JJT7ew12D

そもそも《アッシュ・シャイン》が例の魔法殺しに
特攻だつてのを発見したのは、
そのグラッドパーティの魔法使い、ガルだろ？
涼しい顔で魔法殺しを魔法でホイホイ叩き潰してる姿を最初に見たときは、
もう乾いた笑いが勝手に出るレベルだったわ

784：名無しの冒険者 ID：LDTGgr58g

どこの世界にも猛者っているんだなって感じた瞬間だな、そりゃ
まあ、そんな彼らのおかげでこっちも情報を得ることができて、
何とか戦えるようになってきたわけなんだよな
事前情報なしで戦うのは、俺の腕じゃ無理！

785：名無しの冒険者 ID：ERTHgrs6e

みんながみんな、あんな動きをできるわけじゃないからな
うちはうちにできる範囲でやればいいのか
オートマターには何度も首飛ばされたけど、
それでも戦い続けて何とかできるようになってきた
諦めず何度も挑戦することが大事よ

翌日ログインすると、周辺が何も無い更地さらちになっていた——なんて物騒な展開などではなく、前日ログアウトする前の部屋のままだった。

ほっとひと安心して周囲を見渡すが、雨龍さんも砂龍さんもない。どこに行ったのだろう……とりあえず、簡単な食事で腹を満たす。食事を終えても、まだ二人は帰ってこない……

（まさか、捕まったか？ それにしちゃ部屋の中が綺麗きれいだ。あの二人と有翼人がこの部屋で戦えば、部屋の中がぐちゃぐちゃとなりそうなものだが。単純に外出しているだけ、か？）

一度深呼吸してから、《危険察知》を使用……すると、二人はこの宿からそう遠くないところにいるようだ。この宿を指して帰ってきている途中なのかもしれない。

そして、その周囲に四人ほど有翼人がいることも分かった。むろんあの二人がそれに気が付いていないはずがない。あえて放置しているんだろう。

この速度でこつちに向かっていると、大体一〇分前後で帰ってきそうだ。
（すぐに出られるように、旅支度たびしどを済ませておこう）

忘れ物などが無いように確認しながら、装備を着込み、外套がいのちを羽織はおっていつもの姿になる。

と、そうして支度が済んだところに雨龍さんと砂龍さんが戻ってきた。

「お、用意はできているようだ。食事はどうした？」

「あ、自分のほうで適当に済ませました」

「そうか、ではわらわ達もさっさと支度して、ここを出ようかの」

そんな会話と共に、お二人とも素早く身なりを整えた。

「土産みやげはすでに買っておいた。あとは帰るだけだ」

「了解です」

土産——つまり魔王様に見せるための例の物はすでに用意済みってことか。

宿屋の人に旅立つことを告げ、見送られて外へ。

相変わらずこちらを警戒する有翼人の反応が六つほどあるが、気が付いていないふりをして帰り道に行く。

「いくつかトラブルもありましたけど、いい土産話ができそうですね」

「話ばかりでは物足りんから、土産そのものもそれなりに買っておいたからの。しばらく話の種には困らぬぞ」

そんな会話を交わしながら、今いる島から中央の島に渡る筒状の移動装置に入る。

筒を抜けてやってきた中央の島にも、こちらを監視する有翼人の存在が八人ほど感じられた。でも、こちらが何もしない以上手出しできないように、距離を詰めたりはしてこない。チリチリという、苛立ちいらだちみたいなのを首筋あたりに感じるだけだ。

『分かっているだろうが、放置だ。身構えてもならぬ』

『ええ、心得ています。奴らにこちらを探るきっかけを与えるわけにはいきませんから』

砂龍さんからの念話に、そう返す。何かあれば直接調べてやる、という気配を隠しきれていない有翼人達を無視して、地上と行き来するための装置の前に立つ。

自分達以外にも、観光を終えたと見られる様々な種族の人が順番を待っていた。

「長生きはするものじゃ、こんな場所を見られて楽しかったわい」

「じーちゃん、帰るまでが旅行だかんね？」

「そうじゃな、帰るまで気を付けていかんとな」

自分達の前では、老人と子供、そして夫婦と思われる二人からなるダークエルフの四大家族が、この空の世界の感想を話し合いながら順番を待っていた。

（こういう一般の人々の生活を、有翼人達がぐちゃぐちゃにしようと考えているとは、皆は夢にも思っていないんだろうな）

無邪気に話す子供と、そんな子供に優しい微笑ほほえみを向ける老人。こんな穏やかな風景を一瞬で消

し去るのが戦争ってやつだ。リアルでも沢山発生して、そしてこれからもまた沢山発生してしまうんだろう。

でも、今回有翼人が仕掛けようとしているやり口だけは、事情を知る自分達が協力し合って絶対に阻止してみせなければな。

そんな風に決意を新たにしているうちに、自分達の順番がやってきた。

装置の中に入ろうとする一瞬、見張っていた有翼人達から一斉に強い殺気をぶつけられたが、自分も雨龍さんも砂龍さんも揃ってスルーした。こんな見え見えの挑発に乗るほど、こっちは安くない。

向こうの歯ぎしりが聞こえてきそうな雰囲気を感じつつ、ついに地上に戻ってきた。色々あったせいで、妙に懐かしなつかしく感じる。

ファストの街に立ち寄り、軽く食事をとった後、フォルカウスの街へと向かう。フォルカウスで一泊したら、次に魔王領へと向かう予定である。

だが……隠れている人が一人、こちらを追ってきていた。といっても警戒はしていない。追ってきているのは、グラッド達のPTメンバーパーティの一人、レンジャーのジャグドだと《危険察知》で分かっているからだ。

（ここまで姿を現さないってことは、相応の理由があるんだろうな。で、人気がなくなってから距

離を詰めてきたってことは、追ってきた理由を教えてくださいませんか？)

実はジャグドは、自分達が地上に降りてファストの街に向かう途中から追ってきていた。だが、話しかけてきたりせず一定の間合いを維持していたのだ。だから、こちらから話しかけるのもここまで控えていた。

「どうせバレてんだろうからこのまま挨拶あいさつさせてもらうぜ、アース」

と、透明状態を維持したままのジャグドの声が聞こえてきた。自分達三人はその声に反応して振り返る。

「ああ、ジャグド、でいいんだよな。そちらも暇ひまじゃないだろうし、早速用件を聞かせてもらおう」

グラッド達も色々と動き回っているから、暇などあるはずがない。にもかかわらずこうしてジャグドをよこしてきたってことは、もしなければならぬ重大な用事があるのだろう。姿を隠したままなのも、それなりの理由があるはずだ。

「これから魔王様のとこに行くんだろ？ そのときにいつも渡しておいてくれ。ダンジョン内で倒したオートマターが落とす部品とかだ」

そんな言葉と共に、ジャグドの手だけが見えるようになって、一つの箱を渡された。工具箱ぐらいの大きさだが、軽く中を覗いて見ると、色々な金属片がぎっしりと入っていた。箱を渡し終えた

ジャグドは、再び完全な透明状態に戻っている。

「魔王様が見れば、今プレイヤーが活用している方法とは別の使い方が見えてくるかもしれないって意見が、うちのゼラアとガルから出たんだよ。で、グラッドもその可能性は高いと見て、ちょうど魔王様のとこに行くアースに渡せって頼まれたってわけだ。その箱にはいろんなパーツをかき集めて入れている。ゼッドにバレないようにやらなきゃいけなかったから、ちっと面倒だったか」

ああ、グラッドPTでもゼッドだけは蚊帳かやの外だからな。彼に何やってんだ？ って訊きかれると困るだろう。全てが終わるまでは理由を話すわけにいかないんだから。

「なるほど、話は分かった。これも必ず魔王様に提出する。任せてくれ」

そういうえば掲示板で、そういうメカ系のモンスターが出るとか何とかって話で盛り上がったな。そいつらの部品となれば、ちゃんと届けられないとな。

「じゃ、俺はまた空に帰らなきゃならねえからよ、ここで失礼するぜ。何か分かったら、報告会で言ってくれ」

そう言い残し、ジャグドは立ち去った。預かった箱はすぐにアイテムボックスにしまい、なくさないようにする。

「良い土産が増えたようじゃな、そしてあの隠形かくぎよう……ふふ、なかなか人族もやるものよ」

おっと、雨龍さんがジャグドを褒ほめている。雨龍さんから見ても感心するレベルの隠形術だった

か……やっぱり特化している人の技術ってのはすごいんだな。確かに、《危険察知》がなければ自分にはジャグドがいることを察知できなかったと思う。雨龍さんや砂龍さんなら平然と見破りそうだけだ。

「真つ向勝負だと、アースが勝つのは難しかろうな。もつとも、お前の持ち味はそこではないが」言われなくたって分かってますよ砂龍さん。グラッドのPTメンバーは全員猛者揃いだからな……ちよつと前にジャグドとやった勝負も、初見殺しの即死攻撃で勝ったわけだからね。戦闘メインに鍛えた人と、あっちこっちふらふらと手を出した人間では差がつくのは当然だろう。

「彼らには彼らの、自分には自分の味つてものがありますからね。さあ、フォルカウスの街へ行きましょう」

フォルカウスは久々だ。街の様子は変わらないままかな？ それとも変わっているのかな？ ちよつと楽しみだ。

そうしてやってきたフォルカウスの街は、相変わらず雪の中にあつた。今も、チラチラとはあがる雪が空から舞い降りてきている。

「さて、今日休む宿を探すか。あまり混雑はしておらぬようだから、そう難しくあるまい」

砂龍さんの言う通り、人通りは多くもなく少なくもなく。一定の活気はあるが騒がしいと言うほ

どでもない。まあ、イベントとかがない限り、攻略中のエリア以外の都市はこんなものだ。今も大半のプレイヤーは皆空の上……ちらほら見かけるプレイヤーは、街の人相手に商売してるとか、商人の用心棒つてのが大半だ。

「そうですね、さつさと宿を決めてしましましょうか——あそこかどうでしょうか？」

目に入った宿を適当に指さすと、雨龍さんと砂龍さんからも反論は出なかつたのでそこに行き、部屋もそこそこ空きがあつたのですんなりと決まつた。

割り当てられた部屋に入つて軽装になり、腰を下ろすと、つい大きな息が漏れてしまう。

「アース、疲れたようじゃの？ まあ、わらわ達は先日まで敵の本拠地に潜り込み、情報を集めておつたのじゃからな……あまり気が休まらなかつたことを鑑みれば、無理もないのう」

雨龍さんの言う通り、空の上では常に警戒状態にあつたから、こうやって「ワンモア」世界の中で気を抜いていられるのも久しぶりな気がするよ。

と、そんな感じの自分とは違い、雨龍さんと砂龍さんは立ち上がった。

「アース、少し我らは出てくる。一度龍の国に戻つて米や味噌といった旅に欠かせぬ物を補充せねばならぬぞな」

ああ、買い物ですか。お二人の邪魔をしたくないのと、一人になりたい理由もあつたので、出かけていくお二人を見送る。

そしてしばらくして部屋の中が静かになった後……久しぶりに義賊小人のリーダーを呼び出した。「親分、何か御用で？」

相変わらず呼ばずすぐに駆け付ける小人リーダーに、大きな賊の集まりが突如消息を絶ったという話を耳に入れていないかと質問する。

そう、空の世界で襲ってきたあいつらが、有翼人に連れ去られた盗賊なのかどうかを確認したいのだ。

「少し、お時間を頂いてもよろしいですかい？ 部下にも確認を取りてえんで」

小人リーダーの言葉に自分は頷いた。情報は少しでもあつたほうがいい。

小人リーダーは「一〇分ほど頂きやす」と言つて姿を消す。雨龍さんや砂龍さんはおそらく今日は買い物で忙しくて帰つてこない可能性が高いし、一〇分ぐらいなら構わないだろう。

そしてきっかり一〇分後、消耗品の数などを再チェックしていた自分のところに、小人リーダーが帰ってきた。

「お待たせしやした。部下達からの情報も交えてお伝えさせていただきましたきやす——」

そうして小人リーダーが話したところによると、三〇人程度の中規模盗賊団が七つ、五〇人以上の大規模盗賊団が四つ、騎士団などの討伐隊に消されたわけでもなく返り討ちにあつたわけでもないのに、姿を消しているとのことだった。

「ふうむ、かなり多いな。頭目争いなどで同士討ちをやらかしたつて線はねえのか？」

四〇〇人以上も消えているつてことになるよな。それらが全員攫われたとは考えたくないの、自分はそう訊いてみた。

「へえ、そういつた線もありやすが……その可能性が高え馬鹿な集団は数に入れておりやせん。また、実際に潰れたことが直接確認できた連中ももちろん含んでおりやせん。結構な数のクズどもが頭目争いをやっていたんでやすが、その顛末も見届けておりやすんで、そこら辺の抜けはまずねえかと」

それを聞いて、つい反射的に舌打ちをしてしまった。四〇〇人以上のサンプルを有翼人が手に入れている、そいつらの体をいじくり回して得たデータをもとに、あの洗脳装置が稼働しているとしたら……そう時間を必要とせず、空の島々にいる人達の洗脳が完了してしまうかもしれない。

「その確認できなくなった連中の種族は分かるか？」

「へえ、ドワーフと魔族を除く各種族が混じつてやしたが……」

頭痛が強くなったのは気のせいではない。ドワーフ族と魔族以外の全種族について、どうすれば効率よく洗脳できるのかの情報を有翼人達側は得てるつてことになるぞこれは。むしろ、そういったデータが集まったからこそ、地上への侵攻計画を始めたと考えるほうが自然か？

「そうか、良い情報を持つてきてくれた。この情報を得た上で、ここからどう動くべきか……」

ぎぢぢと歯ぎしりをしながらこれからの行動を考える。残された時間は、こちらが考えているよりはるかに少ないと見るべきだ。

この情報は報告すべきことではある、あるが……ダメだ、まずは明日、魔王様に直接言おう。予想以上に衝撃が大きい。これを今日の報告会で流したら、どれだけ動揺が広がるかが恐ろしい。

そしてその動揺から、どんなミスが生まれるか。それが何より怖い。

「親分、あつしらは今の状態で地上のクスどもを抑えやす。親分は親分のお仕事に集中してください」

「ああ、また用があるときは呼び出す。行け」

小人リーダーの言葉に頷いた後、彼を帰した。

ここで地上に戻ってきたのは、今の話を聞くためだったのでは？と思えるぐらいに重要な情報だった。これは大きい。その分ショックも大きかったが……まだ間に合うタイミングであつたと信じたい。

（こういう情報を流すのは禁じられているが……もし禁止されていなかったとしても、信じてはもらえないな。むしろこつちがおかしいというレッテルを張られて、孤立したところで有翼人の暗殺部隊みたいな連中にさつくり殺られるって流れだったかも。前も同じことを思ったが、洗脳が目に見える攻撃じゃないという点は、厄介すぎるにも程があるっての）

チラチラと雪が降る景色を窓越しに眺めながら、あれやこれやと考える。かといって、考えても良い解決方法が都合よく浮かぶはずもない。そんなことは分かっているが、考えずにいられないのだ。

（例の洗脳装置を破壊できたとしても、洗脳の進み具合によってはそれで正気に戻れるかどうか……ダメだ、どうしてもいい方向に、ポジティブな考えに持つていくことができない。唯一の救いは、まだそうなつてはいないってことだけか）

有翼人達が仕掛けてきた攻撃の厄介さを再確認させられるばかりだ。今回は、かつて妖精国であつた戦争と同じか、それ以上の多大な被害を出してしまうかもしれない……だが、それを何とか阻止したい。幸いにして、仲間がいるのだから。自分はこうして地上に降りてきたが、空で頑張ってくれている仲間がいる。だから諦めるという選択肢だけは存在しない。

（とにかく、今できることをやる。それしかないんだよな。気ばかり急いでも、仕損じるのは目に見えている。同じ結論になつてしまうことは分かっているんだが、それでもな……）

考えることを止めてはいけない、考えを止めた時点で進歩も変化もなくなつてしまう。相手が強大であればあるときこそ、何度同じ結論に達すると分かっていたとしても様々な方向性から物事を考えなければならぬ。考えることを止めなければ、突如解決策の閃きが舞い降りる可能性があるのだから。

(とにかく、まずは魔王様に直接報告。そこは決定事項としていいだろう。この情報をどう伝えていくかは、魔王様と話し合って決めよう。あとは、空に戻る方法だが……そっちは雨龍さんと砂龍さんが言っていたように、龍神様や黄龍様にお力添えいただくしかないだろうな)

考えが纏まってきた頃に時計を確認すると、ログアウトすべき時間が迫ってきていた。結構あれこれ悩んでいたためか、かなり時間を食ってしまったらしい。あと少しで報告会の時間を迎えるわけだが……今回の自分は今みなからの報告を聞くだけだ。

やがて報告会は始まり、細々とした報告が続く……

「報告。ちよつと前に、空を飛んでいると弾かれる場所があるって報告されていたよな？ あそこが怪しいってんで、有翼人達が本格調査に乗り出すという噂を聞いた。なのでできる範囲で探ってみたところ、その噂はどうやら間違いなさそうだ。もしそこに有翼人が手に入れたらまずいものがあつた場合、どうする？」

そこへ、ツヴァイらしき声から報告が入った。おいおい、そんな話まで上がったのか……唸り声やひそひそ声がいくつも耳に入ってくる。

「最悪、強行突入でもなんでもやって、危険物を破壊するしかないでしょう。しかし、それをすれば間違はなく、有翼人達にこちらの存在がバレます。魔王様、どちらを取りますか？」

その声と同時に沈黙が訪れる。誰もが魔王様の決断を待つ……そして。

「――物にもよるが、もし未知の兵器、武器だった場合は、バレても構わん、その場で破壊しろ。それ以外の場合は……今はまだ見送れ。いいな？」

かなり悩んだ末の決断。その声からそう察することは容易だった。そんな魔王様に、更に気を重くさせる情報を持ち込まねばならんのか。まったくもって気が重い……けどやらないわけにはいかない。

何とか逆転の一手を見つけ出さないと、苦しすぎるな、今回の戦いは。

4

翌日。ログインすると、雨龍さん砂龍さんが用意してくれていた朝食を食べ、装備を整えてフォルカウスを出発。魔王領に入るまでは問題なかったのだが……ある程度進んだところで天候が急変し、急激に吹雪いてきた。

とはいえ、自分は魔王様から貰った特製のマントがあるから、これだけ吹雪いても何の問題もない。それに……

「ふむ、少々風が強いが……大したことはないな」

「アース、お主はどうじゃ？ 問題ない？ ならばこのまま進もうかの」

龍であるお二人にとつても、ちよつと風が強い程度の認識でしかなかったようだ。普通のプレイヤーだったら即座に街に逃げ込むレベルなだけどねえ。

そんなわけで、吹雪いている中をいつも通りの速度で歩く自分達三名。モンスターもぼつぼついるが、この吹雪を凌ぐことに専念しているようで、その場から動かない。おそらくちよつと穴を掘ってその中に避難しているんだろう。そんな彼らにこちらからちよつかいを出す理由は欠片もないのでスルーする。近づいてこないと分かると向こうも警戒を解いたのが、《危険察知》で分かる。「この辺りまで来れば他の者の目もあるまい。魔王殿の城の近くまで転移で移動するぞ」

転移は、雨龍さんと砂龍さん、魔王様といった一部の存在だけが使える（と思われる）能力。多くの人の目につく場所を使うと騒ぎになってしまう。

この吹雪で外をうろついている人がいる可能性はかなり低いのだが、念のため自分も《危険察知》で気配を確認しておいた。かまくらを作って緊急避難している人とかがいるかもしれないからね。

「よし、では飛ぶぞ」

砂龍さんの言葉の直後に、足が宙に浮くような感覚を味わい、そして再び雪の上に立っている感覚が戻った。が、頭がふらついて片膝をついてしまった。

転移はこれまで何回か経験してはいるのだが、やっぱり慣れない。どうしても一瞬気持ち悪くなったり、今回みたいにふらついたりする。独特の感覚に体が対応できないのだろうか？ その理由は、そこそこ歳食ってるから？ ……このことはあまり考えないようにしよう、うん。

「具合でも悪くしたかの？」

雨龍さんがそう話しかけてくるが、自分は「大丈夫です、軽い立ち眩みのようなものですから」と告げてすぐに立ち上がる。一応ステータスを確認するが、これといってデバフが付いたりはない。

「ならばよい。ほれ、魔王殿の城までもうすぐじゃ」

雨龍さんが示した方向に顔を向けると、確かにここからは魔王様の城が肉眼で見える。かなりの時間短縮になったのは助かった。まあ今回は吹雪が強かったから転移を使ってくれたが、晴れていた場合は修行代わりにここまで走らされていた可能性がある。

魔王城前には魔族の兵士がいていったん止められた。しかし魔族の皆さんも含めた大規模訓練の教官役を担当した雨龍さんと砂龍さんは当然顔パスだし、自分も魔王様のくれたマントのおかげですぐに城内に通してもらえた。あくまで念のための確認に過ぎなかったようだ。

「魔王様より、お三方がいらっしゃったらすぐに通すようにとの命令が出ております。どうか私について来ていただきたい」